

IV 花 き

実 況

1 キク

奥越の9月13日の調査で、9月咲きコギク品種「映虹」では草丈108 cm、葉数76枚で開花はじめ、「山手白」では草丈94 cm、葉数55枚で開花はじめ、「くるみ」では草丈100 cmで葉数54枚、蕾径9 mmであった。

10月咲き品種の「ミスベティ」は草丈90 cmで葉数49枚（昨年：草丈90 cm前後）であった。

病害虫として、「花乙女」はCChMVd感染が疑われる。斑点細菌病は少～中発生、アブラムシ類は少発生、アザミウマ類は多発している。

秋植え用の親株は、去年は圃場によって芽立ちが悪くなっていたが、今年は現段階で目立ち不良は認められていない。

あわら平坦地では秋植えキクの台刈りが8月下旬より開始された。年末出荷用の寒菊は8月上旬にハウスに定植された。

病害虫は特に確認されていない。

9月5日に、福井花卉出荷組合で圃場巡回が行われた（写真2）。

越前町宮崎地区で、9月17日の調査（昨年：9月19日）では、9月咲き小ギク品種の「ゆかり」（桃色）は草丈98 cm、蕾径55 mmで収穫間近（昨年：収穫終了）、「かれん」（赤色）は草丈89 cmで3割程度開花（昨年：草丈82 cmで9割程度収穫終了）、「りぼん」（赤色）は草丈83 cmで3割程度開花（昨年：草丈93 cmで収穫はほぼ終了）、「すいこ」（白色）は草丈98 cmで7割程度開花（昨年：草丈95 cmで収穫終了）であり、昨年より収穫が遅くなっている。

病害虫としては、黒斑・褐斑病、アザミウマ類の発生が認められている。

二州の9月咲き小ギクは、9月17日の調査（昨年：9月19日）で、「わかさ」が草丈95 cmで開花始め（昨年：草丈117.8 cm、蕾径7.3 mm）、「映虹」が草丈95 cmで開花盛期（昨年：草丈99.2 cmで開花盛期）、「おりがみ」が草丈105 cmで開花盛期（昨年：草丈108.6 cmで開花盛期）であり、各品種とも昨年より草丈が短めで開花は早くなっている。9月20日前後に出荷最盛期の予定である。

病害虫として、一部品種でダニ類が少発生、また一部品種で下葉の枯れ上がりが目立っている。

10月咲きコギクは、9月17日の調査（昨年：9月19日）で、「はくろ」は草丈65 cmで未出蕾（昨年：草丈83.4 cmで未出蕾）、「お吉」は草丈75 cmで未出蕾（昨年：草丈93.2 cmで未出蕾）、「ふるさと」は草丈80 cmで蕾径4.5 mm（昨年：草丈81.4 cm、蕾径5.0 mm）であり、昨年より草丈が短くなっている。

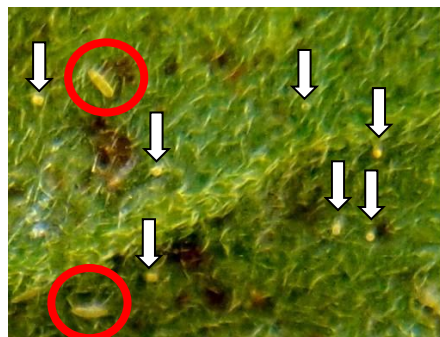


写真1 アザミウマ類の食害痕と成虫（赤丸）・卵（矢印）



写真2. 福井花卉出荷組合 巡回

病害虫として、一部品種でハスモンヨトウが少発生している。

若狭の9月咲き小ギクは、9月18日調査（昨年：9月18日）で、「楽園」は草丈113.8cmで立弁（昨年：草丈98cmで立弁）、「初秋」は収穫終了（昨年：収穫終了）、「おりがみ」は草丈113cmで収穫終盤（昨年：草丈103cmで開花盛期）であり、昨年より草丈が低くなっている。

施設栽培の10月咲き小ギクは、9月18日調査（昨年：9月18日）で、「おちば」は草丈84.4cmで未出蕾（昨年：草丈70cmで未出蕾）、「白馬」は草丈79.2cmで未出蕾（昨年：草丈79.2cmで未出蕾）、「おりづる」は草丈94.6cm、蕾径3.9mm（昨年：草丈87.2cm、蕾径3.7mm）で、各品種とも昨年と比べると草丈が長い。

病害虫として、アザミウマ類とハダニ類が少発生している。

施設栽培の11月咲き小ギクの電照栽培作型では、7月中旬に定植が行われた。9月18日調査（昨年：9月18日）で、「おちば」は草丈73.8cm（昨年：51.8cm）、「白馬」は草丈74cm（昨年：77.6cm）、「おりづる」は草丈83.6cm（昨年：草丈74cm）で、昨年より草丈が長くなっている。

病害虫としては、アザミウマ類とハダニ類が少発生している。

寒ギクは7月中旬に定植された。9月18日の調査（昨年：9月18日）では、「冬一番」は草丈38cm（昨年：草丈36.6cm）、「寒桜」は草丈31.6cm（昨年：草丈38.8cm）、「新年の美」は草丈42.2cm（昨年：草丈35.8cm）であった。

病害虫としては、アザミウマ類とハダニ類が少発生している。

2 ユリ

あわら丘陵地では、5月中～下旬に露地に定植したオーガスタは、8月15日から収穫が始まり、9月上旬で80%の収穫が終わっている。雷山3号はばらつきが大きく、80%近くが抽苔していない。



3 スイセン

越廼・越前地区で、9月9日時点の生育状況は、発根が昨年より早く、花芽発達状況では小花形成期を迎えており、昨年と同程度である。

小樟地区の球根養成圃場では、9月12日から植え付け機による定植が始まった（写真3）。



写真3. スイセンの定植

4 ストック

あわら市では、夏播き秋冬どりの作型に、アイアン系、アーリーアイアン系等の品種が用いられている。直播は8月17日（昨年：8月7日）から開始された。8月17日播種のは、高温障害により発芽不揃いとなったが、19日以降は発芽の揃いが良く、圃場にて八重を鑑別している。生育として本葉5～6対程度である（写真4）。

病害虫は特に発生していない。



写真4. 直播ストックの生育
（9月中旬、あわら市）

越前市では、カルテットシリーズが8月20日頃～9月12日頃にかけて直播された（昨年：8月20日～9月20日）。9月19日調査（昨年9月21日）で、8月20日頃播種の品種では、草丈8cm、葉数8枚（昨年：草丈9cm、葉数10枚）、8月27日頃播種の品種では、草丈3cm、葉数3枚（昨年：草丈5cm、葉数3枚）、9月5日頃播種および9月12日播種の品種では双葉が展開しており、生育は昨年と同程度である。

二州では、年内出荷の作型で、1回目播種（8月中旬）の個体では、本葉2枚程度に生育しているが、大部分の個体が萎れている、これを受けて再播種を行った。2回目播種（8月27日～9月5日）および、3回目播種（9月9日～9月10日）の個体で発芽中である。

年明け出荷の作型については、9月19日～20日にかけて播種が予定されている。

若狭では、8月下旬から9月上旬に直播種が行われた。

5 トルコギキョウ

あわら市の抑制栽培（二度切り栽培）のレイナ系、ロベラ系、クラウン系では、購入した種子冷蔵苗の定植が7月25日から8月上旬（昨年：8月3日から5日）にかけて行われた。活着はおおむね良好である。7月下旬定植の品種のうち、「クラウンホワイト」で天花が開花し始めた。昨年より開花はやや早く、本格的な出荷は10月中旬から始まる予定である（写真5）。

病害虫は特に発生していない。

5月定植のPFソロ系、ロジーナ ver.3、ファイナル系の品種は8月20日頃で収穫が終了した。

病害虫は特に発生していない。



写真5. トルコギキョウの抑制栽培
(9月中旬、あわら市)

越前市では、苗冷蔵の株を7月下旬（昨年：7月27日）に定植した。草丈は83～88cm、蕾長は3cmで3分咲き程度、昨年より開花が早まっている。

病害虫は特に確認されなかった。

6 切り花用ハボタン

福井市の二日市の9月24日調査（昨年：9月18日）では、早いところで草丈50～60cm、葉数30枚程度に生育している（写真6）。

病害虫として、コナガが少発生している。



写真6. ハボタンの栽培

対 策

1 8、9月咲きギク親株のハウス搬入と管理

- 1) 親株のハウス内への植え付け適期は11月上旬までである。キクの根は地温が5~6℃以下になると、新根の発生が悪くなるので、奥越地域や山間部では搬入を早めに行うことを励行する。
- 2) ハウス内に床幅90cm前後、高さ20cm程度の畝を準備する。土寄せ苗を7×10cm間隔で植え付ける。苗（親株）は太くがっしりした花芽のついていないものを選んで植える。
- 3) 植え付け床が乾いている場合は、1日前に灌水し、適湿にしておく。
- 4) 植え付け後は月に1~2回、ジマンダイセンフロアブルやコロナフロアブルで予防散布を励行する。白さび病が発生した場合は、病葉を取り除いた後にチルト乳剤などの治療剤を散布するが、最近各地域でサプロール乳剤の耐性菌がみられるため、EBI剤の散布回数は最小限にとどめる。
- 5) 害虫の卵や初齢幼虫は可視化が困難であるため、親株圃への持ち込みがちになる。特にアザミウマ類、ハダニ類については、葉裏、生長点を中心に殺虫剤、殺ダニ剤の散布を行い、親株圃での蔓延、次作圃場への持ち込みを防止する。チョウ目害虫については、プリンスフロアブルやディアナSC等で抑制することも重要である。殺ダニ剤は、生長点付近に重点的に散布し、キクモンサビダニ等による病気（紋々病）が親株圃に蔓延しないよう留意する。
- 6) 植え付け後は保温等を行い、速やかに活着させる。活着後は奥越では12月、若狭地域では1月下旬まではハウスサイドのビニールを開放し、低温に当てる。
- 7) 低温時の灌水はできるだけ控える。特に植え付けが遅れた場合に土壤水分が高い過湿状態では、活着不良になる場合がある。また、灌水する場合は晴天日の10時ごろがよく、灌水後は換気を十分に行う。

2 ストックの管理

- 1) 昼間の気温が高いと軟弱徒長しやすい。さらに菌核病が発生するので換気に十分注意する。夜温が8~10℃以下になれば、夜間はサイドビニールを閉めて保温するが、気温と湿度の上昇を防ぐため、晴天時には朝のうちにサイドビニールを開放して十分に換気する。
- 2) ストックのホウ素欠乏症は、葉、茎、花の各部位に発現し、葉の表皮の白化、茎割れ、茎の褐色斑点、開花異常の症状として現れる。定植時にホウ砂を1kg/a施用（ホウ素として0.36kg/a）すると発生を防止できる。
- 3) 出蕾を始めたら灌水、液肥施用は中止し、茎葉を硬くしめる。粘質土など乾きの遅い圃場では、さらに早めにこれらの対策を行う。
- 4) 菌核病は、連作地で発蕾期から発生し、株元から褐変して立枯れ症状で枯死する。灌水は午前中に済ませて株元の乾燥を図り、ポリベリン水和剤やトップジンM水和剤を散布する。
- 5) 収穫適期は3~4輪が開花した時（市場によって多少異なる）を目安とし、手で株を引き抜いて収穫する。抜いた株は株元の緑色の部分で切り戻し、花穂が曲がらないよう真っ直ぐに立てて水あげする。
- 6) 害虫では特にコナガの発生があるので登録のある薬剤を定期的にローテーション散布し徹底防除する。

3 トルコギキョウの定植作業

- 1) 栽培期間が長いので、特に土づくりが重要である。優良堆肥を2~3t/10a施用し、30cm以上の深さで耕起する。また多湿にならないように、暗渠など排水対策を行う。

- 2) 無加温ハウスでは、遅くとも 11 月中旬までに植え付けをする。植え付け日の 1 週間程度前からハウスを密閉して、地温を十分あげてから植え付けする。
- 3) 本葉 4 枚になると茎立ち始めるので茎立ち前に定植する。
- 4) 植え付けは、晴天日の午前中か、暖かい曇天の日に済ませる。
- 5) 多湿条件下では、灰色かび病が発生しやすいので、換気を十分に行い、灰色かび病等の防除にアフットフロアブル等の薬剤による防除を励行する。
- 6) 育苗箱と植え付け後に液肥 500~1000 倍を根付け肥として施用する。

4 スイセンの管理

- 1) 今年は降水量が少なめであるが、圃場の灌排水をしっかり行い、適湿にする。季咲スイセンでは、9 月上中旬に土壤水分が安定しないと開花期が遅れる傾向があるので、前年に葉先枯病の発生が少なく、用水が確保できる圃場では灌排水をこまめに行う。
- 2) 促成栽培は温度と灌水管理を十分に行い、品質の良い花を生産する。遮光資材の取り外しは、気温 25℃以下になった時点を目安とし、曇天の時に行う。促成栽培の灌水は 9 月下旬まで土壤水分を見ながら継続し、それ以降は灌水を停止し、根腐れ防止のため、溝さらえ等圃場排水を徹底する。
- 3) 出芽時にゲッター水と剤 1000 倍液で灰色かび病等の防除をする。
- 4) 球根養成圃場の準備
球根養成圃場では、PK 化成を a 当たり 5 kg、マグフミン等の石灰資材を 10 kg 施す。
- 5) イノシシ等獣害対策の実施
イノシシはミミズを食べるため、球根を掘り起こす。電気柵を張ったところでは、草刈や漏電防止の再確認も十分に行う。

5 福井ユリの定植作業

- 1) 定植適期は各品種とも 11 月下旬~12 月上旬であるので、圃場の準備を進める。
- 2) ハウス周辺の排水対策を行い、定植 14 日前を目処に石灰類 10 kg/a、ようりん 4 kg/a、堆肥 300 kg/a を施用し、土壤酸度を pH5.5~6.5 に調整する。
- 3) 施肥は定植 7 日前に有機質肥料 (N-P-K = 6-5-5) 30 kg/a、草木加里 1 kg/a を全量基肥とし、EC を 0.8m S/cm 程度とする。
- 4) 畝は畝幅 120 cm (天幅 90 cm) で、栽植密度 12 cm×12 cm の 6 条植えを基本とする。分球している球根は 15 cm×20 cm に定植し、芽立ち後 2 本に整理する。球根の覆土は 7 cm とする。

6 完熟堆肥の積み込み

施設栽培では、良品生産、連作障害回避のため、良質堆肥が必要である。

- 1) 本圃面積 10a に対し、水田 30a 分の稲わらを積み込む。
- 2) 稲わらにススキ (3 cm 程度に細かく切断したもの) を半分位混合して積み込むと、長持ちする良質の堆肥ができる。市販のモミガラ堆肥も積み込むことで、完熟に近くなる。
- 3) 積み込む場合、10a 分の稲わら (500~600 kg) に、水 1 トン弱と窒素分を補うため石灰窒素か硫安などを 20 kg 程度加え、積み込む。発熱後に、2~3 回の切り返しを行う。なお、リン酸分も加えるとリン酸の肥効が高まる。

AMeDAS のデータ

